

乙	姫	か	ら
浦	島	太	郎
に	告	ぐ	◆



大	坪	奈	保	美
---	---	---	---	---

白山
CREATION

乙姫から 浦島太郎に 告ぐ

大坪 奈保美

白山
CREATION

Hakusan Creation
www.hakusancreation.com

© 2014 by Hakusan Creation
© 2014 Naomi Otsubo
All rights reserved. Published 2014

Design and illustrations by William Ash

ISBN: 978-1-935461-02-9

Printed in the United States of America

目次

乙姫から浦島太郎に告ぐ	9
-------------	---

序文にかえて	11
--------	----

出会い前	15
------	----

乙女たちへ	17
秋の予言者	19
ある日ひとり	20
勇気の孤独	21
お星様へ	22
銀河の龍	23
空き部屋	24
鶴と鬼	25
愛しい宮沢賢治様1	26
シンデレラの馬車	27
私は泣かない	28
宇宙の法則	29
犬と女	30
ハローワークへの道	31
栗	32
放送受信停止のご連絡	33
冬	34
薬	34

ブレない生命体	35
こたつと犬	36
月からのお迎え	37
タヌキ 待つ	38
絶体絶命	39
春の心にな〜れ	40
霊のささやき	41
女はムリ	41
予知夢	42

恋愛 43

あなた	45
出会い	46
呼び水	47
解放前線	48
だるま	50
恋愛のはじまり	51
窓をあければ	51
もうひとつの履歴書	52
愛しい宮沢賢治様2	53
玄関	53
ビッグバン	54
ビジネスホテル	55
花びらの心	55
六月のデート	56
夏	56
無言	57
疑惑	58
流れる優しさ	59
ヘソ	61
言葉というもの	63
日曜日のデート	64
二羽のハト	65

美しいうぬぼれ	65
ふたり旅1	66
ふたり旅2	67
ふたり旅3 化けの皮	68
恩寵	70
踊り場	71
虫	71
恋人たちの朝食	72
逆流	73
ひとり遊び	74
奇跡の人	75
反射する人	76
美しい願い	77
巡る春	78
音楽室	79
沈黙	80
わけのわけ	81
一人歩き	82
柳の枝になりたい	82
プライドと本音	83
雨あがりの花	84
高く高く	85
音の庭	86
定期的調律	87
地上天国	88
新番組放送のご連絡	89
花の涙	90
星になる	90
満ちてゆく月	91
道程	92
ケミストリー	93
タカはあなた	94
空に生きる	95
桜の魚	96

婚約から結婚まで 97

空が見ている	99
信頼と尊敬	100
結び力の計り方	101
婚約異次元1	102
婚約異次元2	103
婚約異次元3	104
婚約異次元4	105
婚約異次元5	106
琴の神様	107
消化中	108
可視	110
信号が変わります	111
波動	112
親友	114
巣立ち	114
心による脳内整理	115
結婚式1	116
結婚式2	116

終わりに 117

あとがき	119
------	-----

乙姫から
浦島太郎に
告ぐ



序文にかえて

学生時代のことだった。

バイト先の学生服販売店の主人が
せまい事務所におかれたイスに腰をおろし
タバコをふかしていた。

それまで 制服をうれしそうに試着する子どもたちと
その母親でごったがえしていた店内は
すでに静まりかえっていた。

その道35年の人間は
店の盛況ぶりに満足したのか はたまた疲れたのか
こっちをみてつぶやいた。

「人の気持ちなんて～ものは あてになりやしない。
店の評判をよくするには 5年もかかるのに
それが悪くなるのには 3日とかからない。
みんなすぐに忘れてしまうのさ。
百年の恋も一時に冷めるってやつと同じだな」

なんとも味気ない話である。
まだ恋愛を夢見る女の子の前で
人間どうしの愛情と 客の店に対する評価を
一緒くたにしてくれたのだから。

それにしても
何かのきっかけで気持ちが変わろうとするとき
それまでの記憶が役にたたないのは どうしてだろう？
命がよろこびのうちに織りあげたときが
簡単に変色してしまうなんてことが
どうしておきるのだろうか？

記憶というものは
そのときの感情波によって型どられた
はかない憧憬にすぎないのだろうか。
脳内スクリーン上で
千変万化する映像にすぎないのだろうか。
そんな怪しげなものを 人はときに
過去として振りむき しかもそれにまた
一喜一憂されながら生きるのだろうか。
冗談だろうに。

でも もしそうならば
「この人こそ」と思える人に出会えたら
私のような好き嫌いのはっきりした人間には
奇跡のようなことなのだから
二人の優しい時間を書いて「記録」してもつていよう。
「あなたが存在するなんて とてもステキ」
そんな驚きをずっともっていたいから。

独りよがりの善悪に踊らされて
腹がたったり 思いまどうときは
百年を一時で忘れないように
一時のうちに百年を感じられるように
二人の「時の記録」を見なおそう。

生き物とおしが互いに感じる
愛おしさが
よみがえってくるにちがいない。

それは 心をも貫いて流れてくる
命そのものの絶対音。
完全に調律されたその音の波は
裁くことに疲れた心に
なつかしさいっぱいの大波を 広げてくれるだろう。

出会い前

亀を守った時間



空き部屋

まあ

なんて からっぽ

みごとに からっぽ

ずっと からっぽ

でも

それでいいの わたしの心よ

それが なにより

ほんとに なにより

今しばらくは

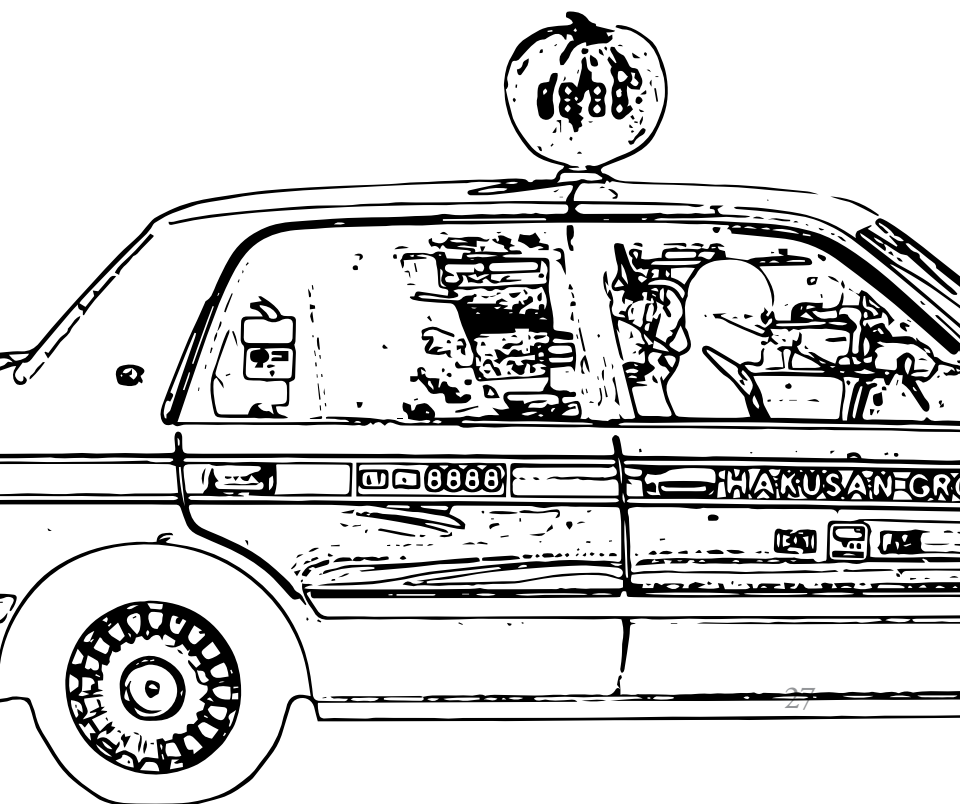
そこでおとなしく しておいで

シンデレラの馬車

真夜中の宴会は
ただの かなしみ

目の前のタクシーは
ただの かぼちゃ

かぼちゃよ かぼちゃ
今日のは 白いな



恋愛

化学反応を
している時間



呼び水

あなたは 赤くなってしゃべる

ほんとうに うれしそうに笑う

それが人を おじけさせる

「あんな風にしていたら 世の中 生きていけない」

そうつぶやいて 思わせぶりに置きざりにする

けれど 私にはわかる

あなたの笑みは 呼び水

命の呼び水

人の心の奥底へと 注がれていく

だから ためらうことなかれ 美しいあなた

解放前線

あなたは私を 唐突に解放した

「結婚には 興味がない」

最初のデートで そう言って
いきなりひとを 無法地帯になげこんだ

「きみの時間をムダにしたくないから
最初にいっておくよ」

ずうずうしいにも ほどがある

「きみという人を もっと知りたいんだ」

それで なんだったっていうの？

「いっしょに 楽しく遊びたい」

近所のがキじゃあるまいし

でも……本当は 私も
そこから始められる人を待っていた

みんな魂があるの ステキなことなの
その声が 聞こえてくるの
その声を聞きながら 生きていくの
オーディションにのぞんで
夫婦役をもらっても この私
どれだけ台本どおりにできるやら
化けの皮はすぐはげて かぶり直せば直すほど
きつくなっていくにきまっている

だから そのあなた！
コーヒーにも手をつけず 私のこたえを待っている男よ

両親の離婚とともに 自らも
法の外にでてしまい ひとり仁王立ちして
この世の夫婦をにらんでいる魂よ

私も あなたを そこから解放しよう

逆流

長い命のいとなみのなか

今 あなたとわたしは

向かい合ってゲームをしている

こたつに広げた地図のうえ

相手の城を攻めようと 怪獣の駒をすすめている

とりかえしているんだよね……子供のときを

ふたりが子供といわれたとき

いっしょには いられなかったから

ここでともに時間をさかのぼり 空白のときをうめている

今 ふたりでいるということが

そういうことであるのなら

わたしは とても うれしい

音の庭

何をなげく？

恋することと愛することは

ちがうから？

ぜんぜん まったく ちがうから？

それでも 戸惑うことなかれ

内なる想いを音にして

そっと この空間へ放とう

それが ほんとうの愛ならば

音は 色とりどりの花となり

あなたの心に 咲きかえる

それで いいじゃないですか

さあ 今日また

星なる音の庭へと出ていこう

地上天国

もしいま

自分が死んだなら

きっと思うだろうなあ

もっとあなたのことを 感じればよかったって

ああ

せっかく別々のからだをもらったのに

なんてことだろう

新番組放送のご連絡

私にできる精一杯のことは
心のなかの美を信じること

そんな自分を
偽善者だと裁く声ができるけれど
自分のことを そんな風にしか理解できない自分は
ほっておく

利己的な倦怠感よ さようなら
もう 酔っぱらいにはもどらない

今はただ
自分の心のなかにだってある美を信じること
その美だけが宇宙で唯一の存在であると
ひたすら信じること
その美を通じてだけ すべてのものと
つながることができると思えること
本当に今は それで十分だと思う

だから ごめんなさい
もう ほかのことは しません

婚約から 結婚まで

つながる時間



信頼と尊敬

あなたは一度も
「愛している」と言わなかった
だから私は あなたを信じられた

私も一度も
「愛している」と言わなかった
それが あなたの魂への敬意だった

わたしたちは
愛の意味を知らないことを知っていた
けれど 愛という音の魔力を知っていた

「好きだよ」
だけがうれしかった
その正直さが なによりもの誠実さだった

この3年間 愛という言葉で
お互いの心を麻痺させなかったわたしたち

だから私は あなたと結婚する

終わりに



あとがき

この詩集には、20代後半の独身から結婚にいたる30代までに、揺れ動きながら変わっていった心情を、詩によるひとつのストーリーとしてちりばめました。101編の詩は、1990年前後の6年間に書かれたものです。

「もし本当にそういう人がいるのならば、いっしょに成長しながら生きていきたい」という思いを心の奥底に抱きながら、「何を愛するのか？ 幸福とはどうすれば見えてくるのか？」と悩み考え、仕事も私生活も、めまぐるしく変化していきました。

50代になった今、当時の若さと率直さにあふれた詩を読みかえして、あの時期をこうして自分をみつめながら抜けたのかと、懐かしく感じています。同じような思いを抱いている方々に読んでいただけたら、こんなにうれしいことはありません。

本のイラスト、デザイン、編集は、すべて夫であるWilliam Ashによるものです。またタイトルは、私の6歳の時の体験がもとになって出てきました。

幼稚園の演芸会のとき、私は先生から乙姫役を授かりました。「海底の樂園、龍宮城」の姫様です。これほどワクワクするような経験はないはずです。

ところが、全くその気になれませんでした。先生が浦島太郎に選んだ男の子は、おかっぱ頭をし、いつも鼻水をたらし、おまけにそれを泥で汚れた手でふいていました。私は、なんとその手をにぎって、連日、踊りの練習をしなければなりませんでした。

演芸会の当日、幼稚園の一室で、私は母に衣装を着せてもらっていました。母が徹夜で仕上げてくれたフリフリの青いドレスをきて、手にはなぜか魔法の杖をもち、頭には、これまたボール紙に金の折り紙をはった王冠をかぶっていました。緊張して不安は頂点に達し、私は母に泣きつきました。

「きっとまた、手がきたないよ。にぎれないよ。どうしよう。」

母は、笑っていました。

「今日は、大丈夫よ。」

そして、いよいよ本番がきたのでした。

私は、一瞬、立ちすくみました。浦島太郎が、なんと美しかったのです。ハンサムどころではありません。切れ長の目にすっとした顔立ち、おまけに態度も堂々としていて清々しい。こっちをみて自信満々の笑みを浮かべ、手をさしのべてきました。その手の……清潔なこと。それから、もう記憶がありません。私

はただ、輝くばかりのプリンス太郎と龍宮城で楽しく踊って、舞台を無事、終えたのでした。

この演芸会の台詞や踊りのことは、ほとんど記憶にありません。ただ、今でもはっきりと覚えていることは、浦島役の男の子の変身ぶりで、彼の本当の美しさが、この日には私にも見える形で現れたことでした。おそらく先生には、それがもともとから観得て(みえて)いたのでしょう。でも私には、手についた鼻水しか見えなかったのです。

この詩集のタイトル「乙姫から浦島太郎に告ぐ」は、なんとなく出てきたものですが、おそらくこの幼少の時の驚きがいつも心のどこかにあり、以来、自分のなかの乙姫が、自分のなかの浦島太郎に何かを伝えようとしているのかもしれません。

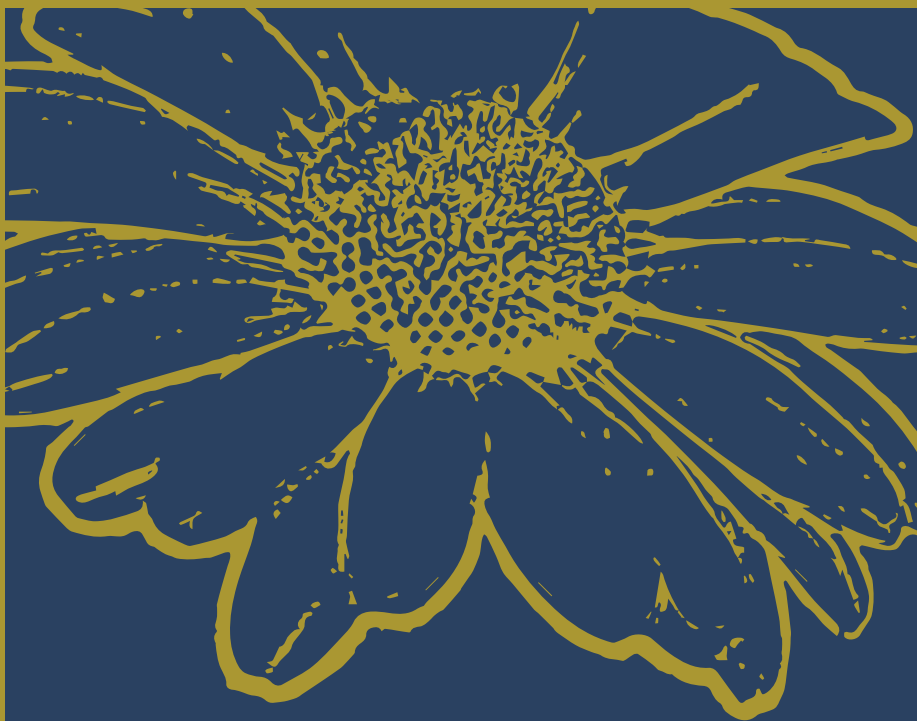
ともあれ、私にとって龍宮城は、すべてが本来の美しさに輝いて見える心の場所であり、詩を書く原動力として、常に、自分の中で働き続けているように思います。

大坪 奈保美

1961年生まれ。「遊びを生きる」という信念のもと、宗教や団体にとらわれない心の旅を続けている。現在、自然豊かな北米メイン州にて、夫とニューファンドランド犬とともに創作を継続中。詳しいことは、日英のバイリンガルサイトである hakusancreation.comにて。



東京女子大学卒。翻訳家、ライター、衛星放送局にて詩人として働いた後、渡米。Bates International Poetry Festival, 2011に招待され、自作の詩を読む。主な訳書には「インディアンの愛」(Medicine Story著)地湧社、「Tibet 光との出会い」(WILL)地湧社、「アマゾン川」(偕成社)、その他。記事掲載雑誌、マリクレー等。



寂しがり屋ながら自立心の強い女が、やっとある男に出会った。
ところが、「だれか」を愛するということ以上に、「いったい人の
何を愛するのか」がわからない。でも、恋愛のローラーコースター
なんて、まっぴらごめん。それを超え、ともに成長していける関係
になるには、どうすればいいのだろう？ そう思いながら、孤独、
恋愛、結婚への疑問と向かいあった6年間で紡いだ、101編の詩から
なるストーリー。幸せな関係を探してまっすぐに、ときにはユーモア
とともにゆるやかに歩んだ、心の道がつづいています。

白山
CREATION
www.hakusancreation.com

ISBN 978-1-935461-02-9



9 781935 461029



90000